

おはようございます。いよいよ今年度も終業式となりました。新学年に向けて、皆さん、それぞれに抱負を持って今そこに立っているのではないかと思います。今日の話は、根本的なこと、母国語の重要性についてです。

「日本語が減びるとき」という本があります。水村美苗さんという作家が書いた本です。この本の副題は「英語の世紀の中で」といいます。英語が世界語として覇権を振るっている現代、英語運用の重要性ばかりが強調されますが、彼女は敢えてその風潮に警鐘を鳴らしています。

実は彼女自身がアメリカで育ったバイリンガルの女性です。しかし、というよりもだからこそ、母国語の教育を大切にして母国語の語彙力、文法力そして表現力を高める必要があると主張しています。

私自身も英語の教員ですが、英語の力の前に日本語の力が必要だと強く感じます。我々は皆母国語で考え、新しいことを生み出しています。社会学者の内田樹氏によれば、イノベーションは母国語によってしか起こりません。なぜなら、母国語によってのみ我々は今までになかった表現を生み出すことができるからです。

「やばい」という言葉があります。かつては泥棒が盗みの現場を警察に押さえられようとするとき、「これはやばいぞ」と使うような、極めて限定的な表現でした。それが今やいろいろな意味で使われるようになっていきます。例えば、「これ、最高」という、全く反対の意味でも「これ、やばい」と使います。このような新しい発想を外国語で行うことはできないのです。

すなわち、母国語を学ぶ重要性は、母国語が私たちの思考の基本であるという点にあることを確認しておきたいと思います。

高山先生と那須先生が夏休みにフィンランドに行かれたと聞きました。もちろん別々にです。そこで思い出した話です。北欧の人々は大変英語が上手で、以前オランダの人達と話しましたが、ほとんど訛りのない流暢な英語に驚いた記憶があります。そして彼らの英語運用能力の高さを羨ましいと思ったものでした。しかし、事はそう単純ではなかったのです。

北欧の人々の英語力の高さは、実は母国語の専門的な学びがあまりにも不十分なためだということです。つまり、母国語で書かれた専門書がほとんどないために、英語で書かれた専門書を使って勉強せざるを得ないのです。そのために英語を幼い時から学習するわけです。彼らは逆に日本人を羨ましがるといえます。「君たちは日本語でほとんどの場合用が足せる。なんてすごい国なんだ」と。彼らは母国語だけでは生きていけないからその裏返しとして英語の運用能力が高いということなのでした。

こうして考えると、日本という国の偉大さがわかります。私たちは、英語運用力の低さを嘆く前に、母国語だけで深い勉強ができる国に生まれたことを誇りにすべきだと思います。

母国語は私たちの思考の土台であり、出発点です。磨いていくことで様々な力がついていきます。単純化して言えば、国語力を磨くことで他の全ての教科の力が伸びるということです。

私たちの思考の全ては基本的に母国語によって行われるということを繰り返して、今日の話を終わります。